

この夏は電力需給が逼迫して厳しい状況が続いている。まだ暑い日が続いているので警戒は続けなくてはならないが、とりあえず厳しい時期はなんとか乗り越えたのではないかと考えている。ただ、専門家によれば、今年の冬にもっと厳しい電力危機がくる可能性があるという。夏の時期の電力不足も困るが、冬にブラックアウト（広域での突如の停電）があると多くの人の生命に関わる。

日本で電力状況が厳しい背景にはいくつかの要因が複合的に働いている。まず、異常気象が続いて電力需要が急増したことだ。真夏や真冬に電力危機が起きやすい。第二の理由は原子力発電所の利用の縮小である。福島原発の事故以来、全国多くの原発が停止しており、これが安定的な電力供給を細らせている。国民の中には原発の再稼働に慎重な人

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

論壇

も多いが、政府は原発の利用を拡大する方向で検討を進めているようだ。

電力不足の第三の理由は、利用拡大が期待される太陽光や風力などの再生可能エネルギーの発電能力がなかなか伸びていかないことにある。再生可能エネルギーは気候条件などに影響を受けやすく、安定的な電力供給となりにくい面がある。送配電

エネルギーの安全保障議論を

網のさらなる整備や、発電した電力を貯める蓄電装置の拡充が求められる。

電力危機だけにとどまる問題でもないが、ロシアのサハリンからの天然ガスの供給に不安があることも大きなリスク要因となっている。ロシアが天然ガスの供給を絞るようなことがあれば、日本への影響は甚大だ。

すぐに中東やオーストラリアなど、他の地域からの天然ガスに移行するというのも難しい。

国内の脆弱な電力システム、異常気象による電力需要の変動、天然ガスなどにおける国際的なリスクなど、日本のエネルギーや電力を取り巻く問題はこれから先しばらくは続きそうだ。エネルギーの安定供給や電力システムの安定化が日本にとつ

て当分、大きな課題になる。

ちなみに、こうした問題に直面しているのは日本だけではない。この夏、中国では異常気象で高温の状況が続く、四川省ではトヨタなど多くの工場が操業を一時停止するようになった。電力危機に見舞われた。欧州では、ドイツをはじめ多くの国がロシアからの原油や天然ガスに大きく依存し

ており、エネルギーの安全保障の問題は深刻だ。

1970年代の2度の石油ショックの時、中東から日本に原油が来なくなるという懸念が広がった。国内で石油が生産できない日本にとつて、これは国の存亡に関わる厳しい事態だった。当時、作家の堺屋太一氏は「油断」という小説を書いた。石油が断たれることで社会が大混乱することを警告する小説であった。

油断という言葉の語源は「油を断つ」という意味とは関係ないようだ。ただ、それまで石油が来なくなるといふようなことは大半の国民が考えなかった。つまり、「油断」があったのだ。エネルギーや電力で何か重大なことが起これば、私たちの生活は大変なことになる。エネルギーの安全保障についてきちっと議論する必要がある。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。